

学校法人 岩崎学園 横浜リハビリテーション専門学校
2025年度 第1回 教育課程編成委員会

- 日時; 2025 年 9 月 26 日(金) 16:30～17:30
- 会場; 横浜リハビリテーション専門学校 604 スタジオにて実施
- 出席者;
斎川大介 藤沢湘南台病院リハビリテーション科理学療法士
錠内広之 (一社)神奈川県作業療法士会監事
野々垣睦美 クラブハウスすてっぷなな統括所長作業療法士
橋本卓雄 校長
渡邊洋治 担当グループグループ長
長谷達也 担当グループ主幹
瀬古恵美 担当グループ教務チーム グループリーダー
田中 千恵 担当グループ 教務チーム サブリーダー(理学療法学科 学科長)
水島 眞由美 担当グループ 教務チーム サブリーダー(作業療法学科 学科長)
机 里恵 担当グループ 教務チーム 課長補佐(作業療法学科 副学科長)
- 欠席者;
鈴川仁人(公社)神奈川県理学療法士会 理事
森岡由美 担当グループ 教務チーム 課長補佐(理学療法学科 副学科長)

● 議事内容

議事内容

1. 学校長挨拶

中間試験の成績管理が終了し、休学・退学が少ない状況であり安堵している。後期が開始され、特に4年生に対しては国家試験対策に向けた徹底したサポートが必要である。本日のアジェンダである教育メソッドについて活発な議論をお願いしたい

2. 委員委嘱について(田中)

委員の委嘱期間は**2025年8月1日から2027年7月31日までの2年間**であり、委嘱状が机上に置かれていることが説明された。

3. 新任委員紹介(長谷・森岡)

新たに2名(長谷・森岡)の委員が紹介された。

4. 検討課題: 岩崎学園共通の教育メソッドの策定(瀬古)

岩崎学園傘下の専門学校7校で共通の教育メソッドを策定し、学園の教育システムを共通体制として発信するための取り組みが今年度から開始されており、その一環として以下の2点について議題提起された。

A. 基礎的な教育の習慣化と飽きさせない仕組み

現状の取り組み(抜粋)

- 理解と知識定着の工夫: 授業冒頭での到達目標明示、授業前後の小テスト(成長差分認識)、グループワーク、骨の触診(身体に触れる体験の重視)、教員とのやり取りを通じた論理的思考の養成、専門科目と基礎科目(解剖、生理学)の結びつけによる知識の反復学習を実施している。

- 学習習慣構築の工夫: 学力強化組を対象とした週1回程度の面談、生活の時間の見える化、合格するまで繰り返す小テストによる習慣化を図っている。
- 飽きさせない仕組み: 上級生が下級生を教えるグループ学習やバディ制の実施、授業中のグループワーク・実技の取り入れ、臨床エピソードや雑談を活用している。

今後の新しいアイデア(抜粋)

- アウトプット機会の最大化: キーワード提示による説明形式、授業の最後に早期整理の時間の設定、反転授業、アプリ利用が提案された。
- 習慣化: 月曜日の1限を全週的全教科の小テストに充ててはどうかという提案があった。
- モチベーション向上: 小テストにポイントやバッジを導入するゲーミフィケーションの活用、Rリーグ(縦割りグループ活動)を利用した学習推進、2年生を対象とした宿泊プログラムの実施が提案された。

B. 経験学習サイクル

定義: 経験、振り返り、概念化、実践の4プロセスから成り、結果だけでなく過程から学習することに重きを置く。

現状の取り組み(抜粋)

- 実技授業・実技練習: 症例を用いた臨床場面の想定学習、実技試験直後の適切なフィードバック、模擬症例の設定条件変更による対応力伸長、OSCEやPBLの活用がある。
- 臨床実習の活用: 実習記録の修正・考察、臨床エピソードからの問題解決能力養成、実際の利用者との機会設定によるコミュニケーション強化を図っている。
- その他: 1年次からの国試対策(期末テスト問題作成等)、学生チューター制度、地域貢献活動(体力測定会、つなぐカフェ)を実施している。

今後の新しいアイデア(抜粋)

- 教員間連携: 関連科目担当者間の授業内容検討会を実施し、科目間の進捗を同期させて学習効果を高めることが提案された。
- 実践力強化: PT/OT合同の事例検討、国家試験対策の実力試験のグループによる振り返り、2年生が1年生を対象とした実技の実施が提案された。
- 地域連携: 地域在住高齢者への生活動作の困りごとインタビューの実施、ボランティア活動への積極的な参加サポートが提案された。
- 外部への発信: 学生が作成した研究ショート動画をSNS等で発信し、研究成果の発信力とモチベーション向上を図ることが提案された。

質疑応答および意見交換

- 共通メソッドの概念: 岩崎学園共通のメソッドは、具体的な行動を統一するものではなく、概念的な枠組みを共通化するものであることを確認した。(瀬古)
- 実習への態度とグループワーク: 外部委員より、実習におけるスマホ使用やピアスなど、プロフェッショナルな態度について、学生がなぜいけないのかを理解していないケースが多いことが指摘された。グループワークを通して学生自身に考えさせ、臨床実習への心構えを養うことの重要性が提言された。(錠内)
- 個別学習とゲーミフィケーション: 学力の低い学生に対しては、アプリを用いた個別化された学習(アダプティブラーニング)やゲーミフィケーションを導入し、小さな成功体験を積み重ねることで学習意欲を高めるべきであるという意見が出た。(錠内)

- プロフェッショナリズム教育：外部のプロフェッショナル研修（例：テーマパークのキャストトレーニング）を導入し、働くことやセラピストとしての役割を演じるという意識を学生に持たせることが提案された。（斎川）
- IADLと生活感の教育：学生の生活感が薄く、IADL（手段的日常生活活動）のイメージができていないため、野外活動や予算内で料理を作るといった体験型のプログラムを導入し、特に作業療法学生は実生活とリハビリがつながるような体験が必要と考えるという提言があった。（野々垣）
- 経験学習の重要性：専門学校教育において、経験学習サイクルの内省と概念化のステップは人間教育に不可欠であり、目標をストレッチした海外研修の事例が学生の自信と成長に繋がった成功例として紹介された。（渡邊）

【欠席者からのご意見】

- 学生一人ひとりの学びを丁寧に支える仕組みが整えられており、授業の構成や実技練習、臨床実習の展開など、どの取り組みも「自ら学ぶ力」を育てようとする意図が感じられます。特に、グループワークやバディ制を通して学生同士が支え合いながら学ぶ姿勢を育てている点は、学習の定着だけでなく、安心感や仲間意識の形成にもつながっており非常に良い実践だと思います。
- 今後の発展としては、小テストやアプリなどで得られる学習の記録をもとに、学生一人ひとりの理解度やつまずきを把握しながら、より個別に寄り添ったサポートができると、さらに効果的な学びが期待できます。また、実技や臨床実習で得た経験をその場限りにせず、振り返りや意見交換の場を設けることで、経験が知識として定着しやすくなると思います。さらに、地域活動や外部への発信など、学外とのつながりを広げる取り組みも、学生の社会的視野を育てるうえで有意義だと感じました。
- 全体として、学生が「学ぶことの楽しさ」を実感しながら、自ら成長していける教育環境が着実に形づくられており、今後の展開に期待が持てる取り組みだと思います。

（2025年10月7日 鈴川 仁人）

5. その他・次回開催

次回委員会は2026年3月27日（金）に開催予定。

文責：水島